

◆ INQUA 回想録

INQUA 大会に参加して ー回想ー

太田陽子（国立台湾大学地質科学研究所特別招聘教授）

1. はじめに

私が初めて INQUA 大会に参加したのが 1973 年、それから 77、82、87、91、95、99、2003、2007、2011 と 40 年にわたる計 10 回の INQUA 大会に参加した。これらのすべてに参加した人はずいぶん少なくなったと思う。この原稿を依頼されたのを契機に過去の会議で感じたことなどを振り返ってみたい。まったく自由に書いてよいのことで、個人的な追想になっていることを御許しいただきたい。目下在外中なので過去の資料が手元になく、不正確の点があり、写真もない。会議の内容、研究委員会の活動などの詳しい正確な記録は会議の都度に第四紀研究（または第四紀通信）に掲載されているので、ここにはそういう正式な記録には出ていない個人的な経験、感想を述べる。

この文章を書きはじめて、いくつかの INQUA の大会や会議前後の巡検でご一緒した方々の何人かすでに世を去られたことに改めて追悼の気持ちに駆られる。とくに私にとっての最初に参加したニュージーランドでの会議や、会議前の巡検でご一緒になり、国際会議に不慣れだった私をいたわってくださった吉川虎雄さん、貝塚爽平さん、会議後の巡検でご一諸になり、その後もウェリントン付近をご案内した藤田和夫さん、1977 年以来 INQUA や IGCP の会議でしばしばご一諸だった米倉伸之さんなど。米倉さんとはカナダでの会議前の巡検のある晩、夜遅くまで日本第四紀学会編集の第四紀地図の解説を一緒に書いていたことを思い出す。

2. 回想

1973 年：初めての国外での国際会議の参加であった。ちょうど文部省在外研究員としてニュージーランド滞在中であった私は、この会議に参加するとともに会議や巡検準備の状況を目の当たりにみることができた。大会は南島のクライストチャーチで行われたが、多くの準備は私が在籍していた首府ウェリントン近郊の地質調査所（現在の地質核科学研究所）で行われた。人口わずか 300 万の国

で、所員が決して多くはない地質調査所の総力をあげての国際会議の実施だった。だから、だいぶ前に日本で INQUA 大会の実施を企画、計画した時、人手が足りないことを理由に後ろ向きの発言があった時に、つい「NZ でさえもできたのに」、といたくなくなった。私は副所長のサゲイト Pat Suggate（第四紀編年や活構造の研究者として著名）、地殻変動研究室をたちあげたレンセン Gerald Lensen（この方も故人となられた）の全面的なサポートのもとで地質調査所で仕事をしていたので、巡検の準備の調査に何回か誘っていただいた。この時に同伴させてもらったことは、ニュージーランドの第四紀編年、地殻変動の理解に本当にありがたかった。

この会議のためにニュージーランド地質調査所により北島、南島の 2 枚の 100 万分の 1 の第四紀地図が編集され、参加者に配布された。この図は、第四紀層や活構造の分布に加えて、挿入図として編年や変形の模式地となる例が多数加わっている。これは大会前の巡検直前に完成し、印刷所から配達されたばかりのまだ湿っている地図を渡されたのが記憶に新しい。この図は、後に日本第四紀学会で第四紀地図の作成にあたってきわめて参考になった。この会議ではじめて直接知り合った研究者とはその後も長く交流するようになった（たとえば地形学者として著名なブルーム Art Bloom）。ニュージーランド滞在と INQUA 大会への参加が私の歴史での国際化のはじまりである。

1977 年：一度この国際会議に出席すると、次の会議に躊躇せずに参加ができるようになる。イギリスのバーミンガムでの会議にもすぐ参加を決めた。当時は今と違って E メールはもちろん、ファックスでさえも限られていたから会議や巡検の知らせに何かと不都合があった。私は会議前のスコットランドへの巡検に申し込んであったが、その集合場所が直前までわからなかった。ロンドンについてから事務局に電話するとその巡検はとりやめになったからウェールズの巡検にゆけという。は

じめてのイギリスで、ともかく汽車とタクシーで指定された目的地まで行って、すでに到着していた一行にあえた時にはほっとした。そこで唯一の日本人、小嶋 尚さんを見つけた。

この巡検ではウェールズでの氷河地形を主とした巡検でそれなりに楽しんだが二つの思い出がある。一つは巡検の行程がきわめてタイトで、たえず時間に追いまくられていたこと、質問の時間さえとれない。ある地点につくと、ここをでるのは15分後、などときびしく時間が制限された。その後いろいろの巡検に参加したが、これほど時間におわれた巡検はない。それ以来私が国内や国際会議の巡検を実施した場合には、かならずある程度の時間のゆとりをとるようにした。もう一つは参加者が英語を話す人ばかりで（この時とは限らないが）、非英語民族は日本人2人、ポーランド人1人、フランス人1人で、食事時にはなんとなく一緒になることが多かった。このフランス人はチリやチュニジアの海岸地形研究で知名なパスコフ Roland Paskoff で、これ以降さまざまな国際会議で一緒になって親交を深め、ついにはチュニジアに招待されて第四紀編年の模式地の一つをみせてもらうことになった。さらに科研費によるチリでの国際共同調査の実施にあたって多大な協力を得るなど、思いがけない副産物があった。国際会議の実施は容易ではない。しかし、会議や巡検をおして新たな交流の機会が得られる。私が INQUA の日本開催をずっと前から企画、実施に努力したのもこのような機会を多くの人にもってもらいたかったからである。ところでバーミンガムに着いて登録をしたときに、なんと私が申し込んだ本来の巡検は実施されたのだという。いろいろな連絡の不手際に唖然としたものだ。

1982年：だんだんと大きな大会ではなく、小規模なプロジェクトごとの国際会議やワークショップに参加する機会がふえてきた。とくに IGCP による海面変化と関連する長く続いたプロジェクト、また活断層や古地震と関係するプロジェクトの会議には招聘される機会も多くなり、巡検を含めた数十人から100人程度の会議への参加は、巡検を主とし、また実質的な討議ができる実り多いものとなった。しかし、第四紀研究者が一堂に会し、分野を異にする研究の第一線の研究に触れることができる大会はやはり大きな意義がある。横道にそれだが、まだソビエト連邦であったころの1982年のモスクーでの大会でも、私にとってきわめて印象に残る第四紀編年に関する面白い発表があったのが忘れ難い。しかし、会議前に実施された黒海沿岸の巡検は IGCP との共催で、黒海北岸のスフミという場所に1週間の連泊であった。毎日同じ場所に泊まって同じ北側の海岸の往復をするので、連日同じ場所をとおり、単調であった。参加者はバス、案内者は別の車なので、長い道中眼に触れる地形の説明もなく、質問のしようもない。特定の場所でバスをおりて案内者の説明があるが、英語がわかりにくく、十分な質疑ができず、不満が鬱積した巡検であった。会議の面白さは巡検の成功と関係することを強く感じた。会議の準備も十分とはいえ、突然半日分の座長をたのまれ、発表者の多くはロシア人でロシア語でしゃべるので、座長としてはタイムキーパーの役割しかできず、これも辛い経験であった。

この会議では貝塚さんが学術会議から派遣された日本の代表であったが、私も IGCP 関係から学術会議からの派遣者となり、発言権はないが[1国一人に限られる]国際評議員会なるものに出席することになった。このような会議に出席したのは初めてで、会議の運営そのほかに興味をもった。その時の INQUA の会長がニュージーランド、カンタブリー大学の地形学教授のまだ中年のスーン Jane Soon で（1973年の国際会議の委員長）、委員長に女性が選出されているのも当時の日本人として新鮮で、また国際評議員会での颯爽とした司会ぶりが強く印象にのこった。

1987年：この大会はカナダのオタワで実施された。会議前にノバスコシア半島からカナダ、アメリカの国境を越える IGCP と共催の巡検があり、会議後にはニューファンドランドの巡検があった。計1か月にわたる普段なじみのない地形であるので両方ともに参加した。これらの巡検は、いずれも厚い氷床に覆われた地域でのアイソスタティックな隆起の場所をみるのが目的であった。学生時代にスカンジナビアのアイソスタティックな隆起の論文を面白く読んで以来（今と違ってなんと限られた情報しかなかったことか）一度は見たい現象の一つであったから、これら二つの巡検には迷いなく参加した。そこで見たことの一つは氷床融解後のリバウンドのために三角州が隆起し、頂置層と前置層、底置層との関係が一つの露頭で明瞭にみえたことである。教科書では当たり前にかいてある三角州の内部構造を直接見たのは初めてで（恥ずかしいが本当の話）あり、おおいに感銘を受けた。ところで、会議と直接関係する巡検の際には、夕食の場所が用意されていることが多いが、この年の会議前の巡検の半分は何の用意もない。夜宿泊地について、はじめての町で、しかも町の中心からかなり離れた宿舎にとまり、それから夕食の場所をさがすというのはけっこう大変であった。これも旅の思い出で、情報に満ち溢れている現在では問題にもならないが。

このときの会議で私はニュージーランド北島東岸の海岸地域の地震隆起に関するポスター発表を行った。このときに私に熱心に質問をくれた人があり、それが USGS のネルソン Alan Nelson である。私のポスターについての長時間の議論のあとで、彼のポスターをみた。地震性沈降に関するもので、これは後に1700年のカスケード地震の発見につながる。このときは計2時間も二つのポスターを前にして議論が弾み本当に刺激を受けた。アランの紹介で目下古津波研究の世界的第一人者となっている USGS のアットウォーター Brain Atwater とも出会い、お二人を含めた科研費による国際共同調査を後に実施した。ポスターでの発表と議論が次の新たな仕事への出発点になった。

この時の会議後の懇親会の席で前記したブルームから、「パプアニューギニアの国際共同調査を計

画し、チャペル John Chappell (パプアニューギニアのサンゴ礁段丘からみた海面変化と地殻変動の研究で世界的に有名)もそれを受け入れているので参加しないか」と誘ってくれた。パプアニューギニアのヒュオン半島はサンゴ礁段丘と海面変化研究の聖地である。私は夢かとばかり嬉しく、経費のことも現地のきびしい状況も考えずに参加の意思を即答した。幸い、帰国後福武財団の研究費を受けることができた、1988年に実施されたこの国際調査は、マラリア蚊のいる熱帯で、テントに男性と一緒に1か月近くも過ごすというきびしい条件であったが、ここでジョンと出会い、サンゴ礁段丘の種々の側面を調査できたのはすばらしい経験であった。はじめどんな内容の研究が新たにできるか不安であったが、日本やニュージーランドでの経験を生かし、完新世の地震隆起を見出した。次いで実施された国際共同調査では、さらに研究地域を広げ、また5万年前までにさかのぼる地震隆起を確認し、さらに古ランドスライドの研究や、完新世の海面変化とサンゴ礁の関係など、いくつかの新たな成果をえることができた。日本ではとく性差別を感じる人が多い中で、女性であることを全く考えずに私を誘い、受け入れてくれたことは本当に嬉しいことだった。さらにすでに研究していた地域に国際調査のグループを喜んで受け入れるジョンの度量の広さに感銘した。私は、日本でもアメリカでも「ここは自分の縄張り」と称する人たちからいやな思いをしたことがあるので、ひとしお感激した。この1988年の調査の総括のために翌年に喜界島でワークショップを実施し、さらにそれがもとで、この世界的な場所で私がリーダーとなって次の国際共同調査を実施することになった。この会議での出会いが二つの新しい研究へつながらることになった。

1991年：北京でアジアで初めてのINQUA大会がおこなわれた。このときは日本学術会議から派遣された日本の代表として参加したので、国際評議員会の出席が3回以上、しかも長時間にわたり、夜9時まで続くこともあった。したがって研究発表をおちついていく時間もなかった。国際評議員会では必要な書類も配布されず、準備が悪いが目立った。この会議で辛かったのはカテゴリの変更、つまり分担金変更の提案である。日本を最高のカテゴリに変更する提案がされ、挙手による採決の結果、私一人が反対で、ほかの国は自分のふところが痛むわけではないから全員賛成となった。その中で一人反対するのはなかなか勇気があることだった。この会議の後で、オーストラリアの代表から、一人で反対した勇気をほめられた。さいわい分担金の格上げは日本学術会議で認めてくれたが、それ以来日本はこれだけの義務をおったのだから、日本でも国際会議を主催し、また諸研究委員会での活動の中で、アジアのかたすみとしか認められていなかった日本の研究を国際的にする場の一つとして日本での開催を強く望む様になり、だいぶ以前から第四紀研連などを通して開催に模索を続けた。紆余曲折を経てその提案が受け入れられるには時間がかかったが、今こうして次回大

会の日本開催が決まり、立場を異にする方々が協力してその実施にあたっていることは嬉しいことである。遠い道のりであった。

1995年：この時の大会はベルリンで行われ、東西のドイツが統一された後でのドイツ開催であった。会場の施設が悪く、冷房もきかず、会場で窓を開けると風でスクリーンがハタハタと動き、図がみえにくく、また暑くても飲み水も得られないなど、会場としては十分な施設であったとはいえない。この時は夫の病気療養中であったため、1週間たらずの本会議のみの参加で帰国した。

この会議で私は日本学術会議から推薦され、INQUAの副委員長として立候補した。日本学術会議の第四紀研究連絡委員会で、日本人を役員に推薦するかどうかが議論になった時、私は推薦すべきであると主張した。国際組織の中で発言権をもつことが必要と思ったからである。議論の結果、日本から副会長を候補者に推薦することを決定し、当時研連の委員長であった私が候補者となった。ベルリンの会議では、推薦されたからには当選したいと思い、各国代表になっている人たちのうちで知っている人々には直接支持のお願いをした。これもなかなか勇気のいることであった。幸い国際評議員会で当選し、当時の日本代表であった米倉さんから「お日出とう」の挨拶を受け、また海外の知人からも次々と挨拶をいただいて、嬉しかったとともに責任の重さを感じた。そして執行部の中で私に何ができるか真剣に考えた。考えたことの一つはアジアの参加国をふやすことであった。

1999年：この大会は南アフリカのダーバンで実施された。執行部の会合が前年にもダーバンで行われたから、2回目の南アフリカ行きとなった。この時には執行部の役員として国際評議員会での資料作り(なんと資料のプリントまで地下の店まで走り回らなければならなかったのである)、4名の副委員長が責任をもつ複数の研究委員会の委員長との面談(過去4年間の活動の総括など)で忙しく、発表をあまりきけなかった。

執行部の一人として印象に残るのは台湾の加盟である。上記のように、副会長に就任して以来私はアジアからの加盟国をふやしたいと念じてきた。インドネシア、タイなども友人をとおして加入の依頼を続けたが、第四紀研究者の数が少なく、責任母体がないこと、分担金の負担がしにくいことなどから、加入の申し出が得られなかった。唯一台湾のみが加入の意思を示し、正式な申し入れを受けた。このことが国際評議員会での正式な議事になる以前に、中国代表から執行委員会に台湾加入に反対の意思表示があり、国際評議員会でも中国代表からの「二つの中国」に反対の強い意思表示があった。無記名投票の結果、反対票2つで台湾からの加盟は認められた。中国以外のどこの国が反対票を投じたか興味があったがもちろんわからない。ところで台湾の加盟を解決する際に執行部が考えたのは、加盟団体を“国”だけにするのではなく、ある地域を参加母体にするという方法であった。だから台湾は中華民国としてではなく、台北地域の第四紀研究者を母体とする形で加盟す

ることになった。これも一つの便法で、実質的に台湾が加盟したことにかわりはない。このような方法がほかの地域にも適用できる可能性を考えていたのだが、その後、南アメリカでいくつかの国が集まって「South America」として参加しており、趣旨が生かされている。

執行委員会は任期中毎年数日にわたって行われたから互いに親しくなった。なんとメンバーの大部分が猫ずきで、執行委員会のニックネームをキャットクラブとしようかという冗談も出た。当時の執行部のメンバーのうちで、レス研究をはじめとする第四紀研究の大長老の劉東生、これも世界的な学者のシャクルトン Nick Schakleton などが世を去られた。哀悼の念にたえない。

台湾加盟にもどらう。台湾加入の実質的な仕事とし、INQUA の研究委員会による小規模な国際会議を台湾で開きたいと考え、しばしば INQUA 大会に参加した台湾大学の劉平妹によびかけた。彼女の努力で、INQUA のネオテクと海岸線の両研究委員会の主催で、台湾の国家科学委員会の協力を得て、2日間の発表、それに続く3日間の巡検を実施した。約十か国からの参加者を得、研究発表は Quaternary International の特集号として2004年に刊行された。次回の日本での大会実施に当たっては台湾での巡検も企画されており（台湾大学の活断層、層序学などの研究で著名な陳文山が案内者となる）、台湾の加盟による国際協力が実を結びつつある。

ダーバンでの国際評議員会で印象に残ったのは、同会に出席している各国代表の約3分の1が女性であったことである。ある苦い経験がある。かつて日本学術会議で、第4部（理学系）の研連の委員長会議があった。その時に60近い研連の委員長のうちで女性が私一人であった。私は、某氏にこれが異常ではないかとささやいた。その方はこのような事態をなぜ異常と思うかわからなかった。今は男女格差が是正されつつあり、男性から逆差別があるとさえいわれることもあるが、本質的にはどうであろうか？少なくとも当時は日本の現状は世界からみて異常であったのである。

2003年：アメリカ合州国レノで開催された。アメリカでの2回目の大会である。宿泊するホテルが会場で、便利はよかったが終日同じ建物にこもることになった。この時の大会では、日本開催を目指して多くの人が努力し、入念に準備して提案したにもかかわらず、急に浮上したオーストラリアでの開催が決まった。なぜ、というプロセスはわからないが、長い間の努力が一蹴されたのは何と云ってもこたえた。「次の次をねらう」ということで残念会が終わったが、本当に後味がわるかった。

2007年：オーストラリアのケアンズでの大会である。なんとなく、複雑な気持ちで迎えたこの大会であったが、もちろん会議が始まればいい天候とよく整えられた会場でそれなりに会議を楽しんだ。世界的な観光地といっても、それほど人のにぎわいもなく、ホテルと会場とは適当な距離で南半球の夏を堪能した。この大会の委員長はチャペルであった。私は、彼がその職責上から会議期

間中は忙しくて個人的な話をする時間などないと思っていたが、彼は、「会が始まればすべて役割分担に従って運営されるから委員長はすることがない」、とってほとんど連日夕食をともにして仕事のまとめなどを話し合った。得難い時間をともにした数日でもあった。

2011年：美しいアルプスの山に囲まれたベルンで行われた。この時は滞在中の台湾から出かけた長い道のりであった。ベルンの大会は出足がおそかったようであるが、実際には風景の魅力もあって今までにない数の参加者を得、日本からも多くの参加者があった。日本の第四紀学会ではみない方を国際会議の大会で御見かけするようになったのは最近の傾向である。会場付近の風景のよさはよしあしで、つい散歩への誘惑にかられる。私も時に会議を抜け出してベルンの町の散歩を楽しんだ。暑い名古屋ではこのようなことは起こらないかもわからない。

この大会で私は口頭発表のほか台湾の古津波に関するポスター発表をした。その隣が旧知のオーストラリアのゴフ James Goff で、ここでも両方の図に基づいて話が盛り上がった。彼の夫人はやはり古津波の研究者で、その後メールでの交流が続き、私が5月に台湾で発表する予定のPPTを送ったら、それについての丁寧なコメント、および今後すべきことについて示唆に富む文章をおくってくれた。このポスター会場で、横浜国大の卒業生であった相馬秀廣さんから乾燥地での面白い着眼点の研究成果をたっぷりときいたが、その翌年に彼は二度と帰らぬ旅路に発たれたのであった。辛い思い出である。

この大会での最大の結果は、日本招致が決定したことである。はじめて日本開催を模索し始めて以来何年たったことであろう。提案を始めた時には（もう20年以上も前、その頃の経緯を知る人も少なくなった）国際学会を実施して何のメリットがある、若い人の負担が増えるばかり、資金のめどもたたないのに無謀、などさんざんに批判されたものであったが、今や第四紀研究者が一丸となってこの大会を迎えることになった。直接準備に当たる方々の大変な努力はまさにこれからであるが、そして大変な負担になることは分かっているが、懸案の日本開催が実りあることを心から願っている。私も学会の会員としてできる仕事を果たしたいと思っている。

個人的に嬉しかったのは、この会議で名誉会員として推薦されたことである。今回名誉会員に推薦されたのは8名で、その中には親友のチャペル、前の会長であったポーター Steve Porter も入っていた。そういえばポーターは写真の名手で、2003年の大会で、INQUA の歴史を話した時、著名な第四紀研究者たちの写真をスライドにして次々とみせ、論文だけでしか知らなかった科学者の風貌をみる機会を与えてくれた。日本人としては琵琶湖の研究で知られる堀江正二さんが含まれていたように記憶している。これも一つの科学史でのアーカイブの方法であると面白く思った。ところで、私が名誉会員に推薦されたことを現在の所属先で

ある国立台湾大学の陳宇高教授に報告した。彼はこの推薦を大変喜んでくれ、台湾大学のニュースレターにその記事をのせてくれ、それを見て台湾大の何人かの人から御祝いの言葉をうけた。そして、スイスへの旅費が自弁であることを知り、なんと旅費を全部台湾大学から支出してくれることになった。一時的な勤務先である台湾大学で自分の本国よりもこの名誉を形に表して喜んでくれたことは感激であり、かつ複雑な気持ちである。

3. 結び

手元に何の資料もないままに書き綴ってきた。まだかきたいこともあるが、そして載せたい写真も多数思い浮かぶのであるが、何分にも手元がない。まったく個人的な随想になったことを改めておわびするとともに、2015年の名古屋での大会が、日本人研究者の一丸となった協力によって素晴らしいものであることを願い、その一部に協力できることを願ってこの回想を終わりとする。